H22.9

社説

河野裕子さん死去

戦後の女流短歌のありかたに新生面を開いた歌人・河野裕子さんが亡くなった。

八月十二日、六十四歳の死だった。

河野さんは、昭和二十一年熊本県生まれ。十八歳で「コスモス」に入会し、京都女子大在学中の二十三歳の時、第十五回角川短歌賞を受賞した。昭和四十六年、第一歌集『森のやうに獣のやうに』を上梓、同歌集は、戦後の青春歌集に画期を成すものと注目された。五十二年には、前年、短歌新聞社より刊行された第二歌集『ひるがほ』により、第二十一回現代歌人協会賞を受賞。第一歌集を対象とするはずの同賞で、異例の受賞となった。師・宮柊二没後の平成二年、夫である歌人・永田和宏が発行人となった歌誌「塔」に入会。夫妻の長男・淳氏、長女・紅氏はともに歌人。

歌集は他に、『桜森』『はやりを』『紅』『歳月』『体力』『母系』等があり、またいくつかの歌書がある。

あっけらかんとした明るく強い歌――そんなふうに河野さんの歌をイメージしていたが、初期の作品をあらためて読み返せば、彼女が、中城ふみ子、寺山修司、春日井建といった先達の血統を引くいわば「負性」を背負った作家であったことが、はっきりする。

・かなしみは母在ることにさかのぼり硝子器の水に溺るる夕日

・栗の木の研ぐがにあをき夏栗の毬はさやさや胸いたきかな

・びろびろと臆面もなき耳ふたつ今日幾人にさらし来しかな

第二歌集『ひるがほ』を埋めつくすこれらの歌は、河野さんが前衛短歌をめぐるあるムーブメントの一員であったことを明瞭に示しているだろう。

しかしその後、自らの資質から汲み出して、河野さんは時代を先駆けてなお平易な作風に歩み出す道を選んだ。

その当否はまだまだわからない。しかし、今、歌を作る女性で、河野さんの開いた世界に力を得ている人は数知れないだろう。

・日雷せつなきかなやうちつけに女が男を見るといふこと　『はやりを』

ここを過ぎて、さらに自在となった歌の世界だった。

あと二十年、健康であったなら、どんな境地が展開されていたことか。

永田家の時間

河野裕子他著『家族の歌』

小島ゆかり

本の表紙に「河野裕子の死を見つめた344日」とあって、少しひるんでしまったけれど、一冊を読んで安心した。裕子さんはいつもの裕子さんで、永田家はいつもの永田家で、わやわやとなつかしい時間が流れていた。

家族が詠んだ歌とエッセー。歌はむろん、文章もみなうまいけれど、歌と文章の呼吸に、それぞれの個性が感じられる。永田和宏―時間と心の厚み。河野裕子―感受性の豊かさと切なさ。永田淳―男っぽさと人間味。永田紅―やさしさと清潔感。こんな印象を受ける。ふだんは別々の人が、ああ、いたわられている生を生きる家族四人が、互いに手をつないで輪を作る。裕子の母、淳の妻、紅の夫、猫のムーとトム、さらに歌の仲間たちがその輪を出入りする。「とてもいい通夜になった。淳がこれまで親には一度も言ったことのない学生時代の愚行、奔行をつぎつぎ話し、みんなで笑いころげたものだ」（「2Bの鉛筆」永田和宏）と不意に痛切に感じたものだ。

・そういえば声を聞かない日が続く北山時雨の欅に降る　淳

・あほやなあと笑ひのけぞりまた笑ふあなたの椅子にあなたがゐない　和宏

いないはずの裕子さんが、いろいろなところにいるなあと思う。

・いつまでも私はあなたのお母さんごはんを炊いてふとんを干して　裕子

（産経新聞出版・一二六〇円）

〈筆者＝コスモス〉